羅針盤

日野　治子
Haruko Hino
関東中央病院皮膚科 特別顧問，
Visual Dermatology 編集協力者

こどもとおとな：病気の症状がちがう？　ほんとう？　なぜ？

世の中の少子化のゆえか，産婦人科と小児科の診療体制が不十分なわれわれの病院のせいか，一時小児の患者さんが少なくなったと思っていましたが，また最近こどもたちの顔をみる機会が増えてきました．こう感じたのは私ばかりでなく，一緒に働いている看護師たちにもそう言われました．

ところで，しばしば遭遇する疾患で，こどもとおとなとの病態がかなり異なっていることに驚かされる場面があります．

たとえば，ウイルス感染症の伝染性紅斑はいわゆる“リンゴ病”として，こどもでは蝶形ないし平手打ち様の頬の紅斑，四肢の網状ないしレース模様の紅斑がよく知られています．それらを典型的というならば，おとなでは非典型的で，風疹様の丘疹が播種状に出現しますし，強い関節痛を訴えます．また，肝障害，肺炎などの合併症，papular purpuric gloves and socks syndrome などを合併することもあります．ほかのウイルスの例では，Epstein-Barr virus のように，こどもで Gianotti 症候群，おとなで伝染性単核症のごとく，あまりに違いすぎて診断に困ってしまう場合もあります．HHV-6 ではこどもの突発性発疹が，おとなになって再活性化のあげくに薬剤性過敏症症候群に関与したりもします．

一般的に，ウイルス感染症はこどもに比べおとなは重症になる傾向があるともいわれていますが，本当でしょうか．確かに麻疹や水痘は，おとなでは重症で入院を余儀なくされる例が少なくありません．2011 年に流行した手足口病はおとなにも容易に感染して，しかも発熱やら巨大な水疱やら，症状が顕著な例が多かったようです．

疾患によって好発年齢があることもなかなか興味があります．すなわちこどもに特有な疾患がある一方，おとなに好発し，こどもではめったにみない疾患があるからです．こどもに特有な疾患は，おとなでは一体どのような状況になるのでしょう？　伝染性膿痂疹や黄色ブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群はこどもに好発しますが，本当におとなでは出現しないのでしょうか．“あせものより”は乳児・小児の専売特許なのでしょうか．

感染症でなくても，膠原病の全身性エリテマトーデス，皮膚筋炎などは，こどもとおとなの病態が異なります．乾癬も，おとなでは尋常性乾癬，関節症状，こどもでは膿疱性乾癬や diaper psoriasis はみられますが，関節症状が強い例はほとんどみません．感染症かどうか，病因がいまだにわからない川崎病などは，こどもの病気の最たるものであります．おとなにはいかがでしょうか，報告はあるものの疑問視されているばかりです．このように疑問が次々に生じてきます．

この少子化・高齢化社会において，小児皮膚科：成人皮膚科として対比させて皮膚疾患をみていくのも興味がありますし，小児皮膚科の重要性が改めて感じさせられます．

今回，第 1 回目として，ごく一般的な感染症のうちとくにウイルス感染症を取り上げてみました．ごく平凡な疾患群ですが，知っておく必要があるものが多いはずです．おのおのその疾患の専門の方々に，豊富な経験から，こどもの場合，おとなの場合，それぞれの症例提示，さらに，こども：おとなで病態の違いがあるか，あるならどのような違いがあるかなどを書いていただきました．また，成人の薬の使用量は周知でも，小児の薬の適用量は（もちろん熟知している方々も多いとは思いますが）なかなかわからないのが実情と思います．Mini-Lecture で取り上げて，簡単に知っておくべきことを解説していただくことにしました．

今回は，各疾患をこどもの病態からおとなの病態とを比較してみましたが，いずれまた，逆におとなの症状の側からこどもの症状を比べることも必要だと思います．